

有島武郎研究

―『三部曲』のうち未定稿および定稿「サムソンとデリラ」「大洪水の前」と
『或る女のグリンプス』との関係を中心に―

宮野光男

大正二年三月、有島は雑誌「白樺」に連載していた『或る女のグリンプス』を一応擱筆した。一応、というのは、有島がこの時、この作品が完成したものだと思っていなかったことがその後の足助素一、吹田順助あての書簡「或る女」はまとめて出す事にした。是から續篇を書く。「足助素一宛、大5・1・11」、あるいは「今年は白樺に精力を集めて『或る女のグリンプス』を本年中に仕上げたいと思つてゐます」(吹田順助宛、大7・1・22)から明らかだからである。当時の有島は、内外ともに多事であり、創作活動は一種の苦痛であり苦惱でもあった。同人として加わっていた「白樺」に対して「『白樺』が日本思想界の北極星、權威者として、高く立つて見たく思ふ。これは恐らく、無駄な望みではなからう。我々は一生懸命に努力しなければならぬ。」(日記、大2・9・26)と期待し、自らもそれに積極的に関わる覚悟をしながら、他方では、武者小路実篤をして「假令創作が余(有島)の職業との衝突を招来することがあつても構はず、どん／＼書く様に」(同前)と云わしめるような一種の停頓の状況でもあったわけである。年譜によれば、大正四年三月、札幌農科大学の教師を事実上辞して上京するまで、有島はいわゆる公職に多忙であつたことを知ることができる。加

うるに大正三年九月、妻安子は肺結核を發病し、その年十一月には鎌倉海岸通りに転地療養、さらに翌年二月には平塚の杏雲堂病院に入院という切迫した事態が生じ、ついに辭職して東京移住を決意せざるを得ないような状況に立ち至ってしまったのである。東京に移り住んでからも、有島には、妻の看病に加えて、長男行光の怪我、里見淳の結婚問題などが起り、「白樺」原稿にもまだ手を着けてゐない。かう事件が頻發して一寸手の着けやうがなくて困つてゐる」(足助素一宛書簡、大4・8・14)という状態が続いていゝた。当時、日記が中絶しているので詳らかではないが、有島は、まさに「心にも身にも餘裕が無く、「僕の生涯に一轉機が來た様に思」(吹田順助宛書簡、大4・6・1)う状態であり、しきりに「生活を如何にかしなければいけない」(足助素一宛書簡、大4・3・22)と感ずる状況であつた。もちろん、これはたんに多事多忙という外面的な原因だけから來る焦燥感ではなく、キリスト教会退会にともなう一連の生活改革――「一層自己の根底に立帰らんとしたる努力」(末光續宛書簡、明43・8・20)の未完成に対する反省をも含んでいたことであろう。それは、後年、さらに徹底した生活改革を志向し、財産処分、農場開放を試みたときのような、「生活をかへねば駄目なり。」(日記、大10・11・11)と感じ、「どうもクライシスが來てゐるのだ。」(同前、11・18)という精神的危機を迎えていたことをも表わしているので

ある。

明治四四年二月より大正二年三月まで、まる二年の年月をかけて書き続けた『或る女のグリンプス』が、気持のうえで完結したとは思えぬままに擱筆した時点で、つまり、それを書き始めた当時の内的状況が本来的な意味で解決されぬままに持ちこされ、さらに加うるに内外ともに混迷の状態をひきおこしていた時に、いわば「少しなりともつなぎに出したい」「(足助素一宛書簡、前出)というような気持で、「白樺」に発表されたのが、『三部曲』所収の三つの戯曲のうちの「サムソンとデリラ」「(大)洪水の前」「(定稿)では「大洪水の前」となっている」という二つの作品の未定稿なのである。

もちろん、この時期に発表された作品は他にもある。しかし、とくにこの二つの作品は、『或る女』成立の事情を考察するために、たんに『或る女のグリンプス』執筆の途中の作品であり、その当時の有島精神状況が同じであったということだけでなく、以下に述べるように素材、あるいは人物造形の方法などにも一種の共通点があり、『或る女』成立をめぐる考察のためには、ぜひ注目しなければならぬものだと思われるのである。

まず、二つの作品の創作意図がそれぞれ、

九月號の白樺に「サムソンとデリラ」と云ふ戯曲を書いて男女交渉の一面を描かんと試みた。(原久米太郎宛書簡、大4・10・4)

ヤベテのゐないノアの子孫を想像する事は僕には苦痛だ。あすこでヤベテに死んでしまはれてはいやだ。ヤベテがあすこで死ぬといふ事は却つて容易な事かも知れないが、夫れは彼が運命の狂ひに対して妥協した事になると思ふ。運命の狂ひが本道に返るまでちつとこらへてくれる方が

僕はうれしいのだ。(足助素一宛書簡、大5・1・8)

というように説明されているが、一方において人間関係における愛の相克のさまを描き、他方、自らの運命の目論見への期待をこめて、現実の否定的状況に耐えてゆこうとする者を描かんとする有島の試みは、人間の持つている肯定と否定の二面性のそれぞれに焦点を絞って描出しようとするものであり、決して一方だけの主題ではなく、両者に相通する主題であるということができよう。それはまた孤独と不安のうちに愛を求めつつ、自らの不可解な運命の目論見に戦のく田鶴子を描いている『或る女のグリンプス』の主題を考察する一つの有力な手がかりともなりうることを指摘することができるのである。さらに、『或る女のグリンプス』の後にこの二つの作品が書かれ、『或る女』前、後篇完成後に、未定稿が定稿に改められ、書き下された「聖餐」が加えられて『三部曲』が完成しているという、『或る女』と『三部曲』とに関わる作品の位置関係の共通性のこともある。また、それぞれの作品が改作という手続きを経て完成したものであるという事実もある。あるいはまた素材について考えた場合、『三部曲』が、その素材を新・旧約聖書から得ているということも、『或る女のグリンプス』の田鶴子の原型を、姦淫の女、あるいは“poetic woman”^[注2]としてのベタニヤのマリアなど、聖書の女性のイメージの中に求めんとした拙論「有島武郎研究——『或る女』の成立をめぐる」(一)、(二)——(以下(一)と称する)の傍証として有効であろうと思われるのである。これらの諸点から、『或る女』と『三部曲』が、改作の意図、主題の発展変化、人物造形の方法などの点で比較検討することの意味を相補的に持った作品であると考えることができるのである。

『或る女』と『三部曲』との比較研究については、以上述べたような効用が一応考えられるが、本論は主として、「サムソンとデリラ」「大」洪水の前」の未定稿の段階での特色、あるいは問題点を分析し、『或る女のグリンプス』との関係を明らかにしてみたいと思う。このことから、『或る女』と『三部曲』とが内容的に密接な関係をもった作品であることを実証する一つの手がかりを得ることができるとは思わないかと思うのである。

二

大正四年九月、雑誌「白樺」に発表された「サムソンとデリラ」(未定稿)は、旧約聖書士師記第十三章より十六章にあるサムソン物語を素材とした作品である。この物語は、一般的には「孤独の英雄であり」「彼の剛力、勇氣、機知、その生涯は、従うべき模範ではなく避くべきもので、警告を供し」たものであると云われているものである。有島は、素材として、士師記に描かれていたサムソンの誕生からその死に至るまでの生涯を、ほとんど全部、作品にとり入れているが、なかでもデリラという、ペリシテの女性との関係に重点をおき、その他のエピソード——サムソンの出生の事情、テムナの女との恋、ペリシテ人との不和の生じた経緯、ガザの遊女との関係などは、会話の中に懐想のようなかたちで組み込まれている。もちろん、素材が聖書の記述から忠実に引き出されているとはいっても有島の意図は、あくまでもサムソンとデリラとの関係を通して、男と女との関係の本質を見極め、それを「男女交渉の一面」として描くことにあり、同じ素材をあつかいながら、デリラを、あくまでも毒婦として描き、サムソンの「すべてはいとよし／たといわれら／最高の知恵のはかり難き配剤を／疑うことしばしばなれど／すべてはいやはてに善しと知らる」(『Samson Agonistes』 1745—48

平井正穂訳による)という神の摂理に対するゆるがぬ確信をうたうミルトンの Dramatic Poem 『Samson Agonistes』とは根本的に異った作品なのである。^(註6)

ところで、未定稿におけるサムソンとデリラとの関係は、いわゆる裏切り物語として一般化されている事実を背景にして考えないかぎり、第一幕の後半に至るまで不明のままにされており、構成上いささか不十分な点として指摘されることである。それだけではなく、デリラのサムソンを裏切る内面的必然性もあわせて説明されない結果となり、デリラの妖婦性は非常に一般的なものになってしまっているのである。もちろん、構成において個性的存在としての度合が稀薄であるとはいえるものの、デリラには断片的にはあるが、聖書の設定以上のもの、つまり有島独自の人間観が瞥見される。それが一つの人間観として定着するのは定稿においてではあるが、サムソンのことばにみられる否定的人間観とあわせて考えてみると興味深いものであることは否めない。

デリラの、^鼻鼻に刺し貫して牛を動かす術は知つて居ながら、床の上のみだらな抱擁に自分の心の捕へられるのを男、知らずに居るのです。

(第一幕)

サムソン、サムソン、虚偽は貴方にある、男にある。(〃〃)

ということばの端々には、男への軽蔑と不信の思いがこめられている。もちろん、裏切りを成功させるための「タクト」にはちがいないのだが、彼女の男への蔑みは、いわば自らの体験にもとづいたものであり、問わず語りのう

ちに彼女の娼婦の性を云い表わしているように思われるし、彼女の、虚偽を詰る声が高ければ高いほど、愛すらも偽りの手段とせねばならぬ女の心の底にある空虚さを思わずにはいられないところである。

またデリラの演ずる恋の奴隷の姿、

私は戀の爲には貴方の犬とも奴隷ともなります。いゝえさうなるのが貴方の獅子となり女王となるよりもずっと本望で御座います。(第一幕)

も、いうまでもなくタクトではある。しかしこのデリラのことばには、田鶴子の倉地に対する、

嘗て知らなかつた捕虜の受くる蜜より甘い屈辱。(十六章)

という、完全なる自己放棄にみられる恋の奴隷としての傾倒ぶりに通ずる逆説的な自己主張がなされているようにも思えるのである。さらに、田鶴子の男性に対して「一種の征服者」(『或る女のグリンプス』十六章)としての姿が、デリラのサムソンへの裏切りが成就せんとしている場面の、

おゝ私の眼睛、私の心の蔵、こゝに貴方の枕が貴方のおつむりを待ちこがれて居ます。貴方はエホバのナザレ人ね。(第一章)

という歓声と嘲笑の中ですで見出されるのである。

* * *

サムソンについても、構成の面からすれば聖書の設定の範囲内にその人物造形がとどめられており、デリラとの生活についてその必然性や問題点を積極的に述べようとはしていない。しかし、デリラと同様断片的にはあるが、有島の女性に対する不信の念を通して、彼の否定的人間観が表わされているように思われる。

女：女：女：行け。高い泉の水は低い谷に落ちる。美しく見える女ほど男の心を強く殺すものはない。(第一幕)

美しいものを醜くし、大きなものを小さくし、強いものを弱くするのは女の持つて生れた呪ひだ。(中略)女の知慧と美しさは、男の知らぬ虚偽と陰謀の幕屋だ。(〃〃)

俺はお前が可愛いゝのだ。然し憎いのだ、憎いのだ、然し可愛いゝのだ。俺の力は女なしにどれ程成長するかを俺はよく知つて居る。——然し何んと云ふエホバの呪ひだ。——俺の力は全く女なしにはどれ程までに萎縮するかをも知つて居るのだ。(〃〃)

これらの、サムソンのデリラに対する罵のことばは、男の女に対するそれであり、その根底には、人間に対する不信が、こめられている。このような、美の中に醜を、愛の中に虚偽を見なければならぬサムソンの状況は、人間の本质にあるアンビバレンツの世界を認めざるを得ない有島のそれでもあろうが、サムソンのこれらのことばにみられる否定的人間観は有島にとって是不可避のものであったにちがいない。士師記の記事を素材にしなから、エピグ

ラムに、創世記第三章十六節「神婦に言ひたまひけるは、我大に汝の懐妊の勞を増すべし」が引かれているということも、女性が、そして人間が呪われた存在であるという有島の否定的人間観が、この作品の底に流れていることを表わしているのである。このことは、後述するように、「洪水の前」においても云えることであり、やがて、カインの末裔意識ということのできる否定的人間観として有島の内部に定着するものである。^(注6)しかし、未定稿が書かれた時点においては、それはやがて肯定に向うべきものとして、有島の希望に包含されているところの、いわばステップとしての否定であると思われるのである。

サムソンは力を知った。而して道を知った。デリラ、サムソンの眼睛が輝いた時には心が盲目だった。醜く盲目になった時、サムソンの心の眼はエ(ホ)バの御心をも讀む事が出来る。(第二幕)

描かれたサムソンの最後が、たとえ士師記の記述の通り悲劇的なものであっても、このサムソンのことばにはやがて眼開かれ真実なるものを見出すことができるのであろうという有島の願いが、記されているのである。

三

著作集第十輯として刊行された『三部曲』に収められている定稿「サムソンとデリラ」は、未定稿との間に大きな変化を見出すことができる。前節において明らかにした有島の人間観の特色は、そのままのかたちで生かされ、さらに明確化されてゆくわけであるがそれが、人間関係や状況設定において聖書の事実に依存するところが多かった未定稿に比して、定稿では、作品内

部において一つの完結した関係のなかで描かれているということが出来る。これは有島独自の人間観にもとづく人物造形がなされているということであり、換言すれば主題が明確になっているということの意味しているのである。

まずその変化の具体相を明らかにしてみよう。新たに増補された第一幕において、ペリシテの群伯や祭司たちが、ペリシテ人に対して暴虐をふるまうサムソンを捕縛するためにデリラを買収するという筋立ては士師記の記述と同様であるが、群伯たちにその決断をなさしめたものが住民の訴状であったとするところは有島の独創である。また、デリラの素姓が明らかにされていないことも注目し値するところである。「政廳」にやってきたデリラを「妓女」^{あそびめ}と呼び、現在やむをえずソレクの谷に住んでいるが、もともとガザに住んでいた妓女であったというのである。デリラの素姓を、このように妓女にすることによって、有島は士師記の記事にある、サムソンの二番目の女性関係であるガザの遊女との話をデリラとの関係と同一化しているのである。元来、

士師記には、デリラの素姓は明らかにされていない。このデリラを遊女とすることは、かならずしも有島の独創ではなからうが、彼の娼婦に対する関心が、聖書学者のような「利己的な目的のために愛をいつわり虚栄心と媚態にふける——罪深い——破廉恥」な女として断罪することにあるのではないこと^(注7)というまでもないことであろう。そこにはむしろ愛に飢え、愛を求める切なる願をもった存在としての「罪の女」が意識的にとりあげられているのである。ホイットマンが親愛の情をこめて「わが娘よ。」^(注8)とうたい、太宰治が「罪深きものは愛情深し」とした人間観がその根底に流れているのである。

この有島の娼婦への一種の傾倒は、『或る女』論に即して云えば、その思想的背景である姦淫の女、「罪の女」への関心と同一線上に位置づけること

のできる特色といふことができよう。

つきに、第一幕におけるもう一つの大きな変化は、デリラの裏切りが一種の内的必然性に支えられたものとして描かれていることである。

デリラが群伯たちの示した裏切りの報酬である「莫大な賞与」に心動かされたことは否めないが、彼女をして決定的決断をなさしめたものは、住民の訴状の中にあるつぎのようなことばであった。

デリラはサムソンの前に赤児たるのみ、奴隷たるのみ。柔順なる牝牛たるのみ……彼デリラの美は捕虜となりたり。彼デリラは世の常の女となれり。〔中略〕サムソンは汝を征服し尽してなほ汝を愛し續くべきや。

愚かなる……〔第一幕〕 ……

これは、奴隷であることよりも征服者であることを望むデリラにとって、最も大きな恥辱を与えるものである。有島は、サムソンの、捕えられ、奴隷としての辱しめを受ける士師記の記述を、デリラの、

サムソンの命を奪はないで下さい。さうしてペリシテ人の群がる前でサムソンと私とを對ひ合つて立たせて下さい。その時私はサムソンとペリシテ人とに私がどんな婦であるかを明らかに知らせてやります。

〔中略〕

私がサムソンに溺れてゐるか、サムソンが私に溺れてゐるか……サムソンが溺れてゐるその証拠を握るまで、私の眼は眠りを知りません。

〔第一幕〕

という思いによってなされたものであるとしているが、ここに、彼女の征服者であろうとする切なる願が、判然と示されているのである。しかも、「征服」ということが、「私を愛しないものを私は動かすことはできません。」〔第一幕〕というデリラのことば、あるいは、サムソンを「憎んでゐる」「〃〃」というデリラに対する群伯丁の「ふむ憎む。憎むといふ時には男は憎む。憎むといふ時、女は時として愛してゐる。」「〃〃」ということばからも明らかであるように、愛によってはじめて可能となるという事実を、デリラの願いの中に見ることができるのである。このことは、デリラが、サムソンへの裏切りを完成したところで、未定稿にはないつぎのことば、

とう／＼……とう／＼……私はお前に勝つてしまつた、私はお前を一人のものにせずにはおかない。……サムソンが私一人のものになる……胸が、この胸が誇りのために張り裂けようとする。

〔中略〕

銀五十枚は乞食にでもお与へ下さい。私の所望はそれのみでは御座いません。サムソンの命を私に与へて下さいまし、さうしてペリシテの人々の前で私とサムソンとを對ひ合つて立たせて下さい。私は黄金の座に、さうしてサムソンは捕虜の座に……

〔中略〕

勝ち誇つたものの接吻の甘さ！〔中略〕私は……私はどうしても勝たねばならないのだ。〔第二幕〕

によって、非常に鮮明な人間像として読みとることができるのである。

デリラを、愛の勝利者として描く有島の愛の論理は、征服という、愛とは全く対蹠的な行為によって完成しているというところに特色を見出すことができるといえよう。それは、愛の欠落のゆえに孤独と不安に苛まれ、姦淫と呼ばれる関係を通して真実なる愛を求め続けた田鶴子が、一度手中にした確かさが、脆くも崩れ去り、本来的な意味での愛の喜びを確かめ得ないものとなつてしまった対象を「分捕品」(「或る女のグリンプス」第二章)ということばで表現したものは根本的に異つたものである。いわば、一般的には否定的な現象の中で、一種の肯定を同時に内包する悲愴美を帯びた愛の論理ということもできよう。これは、「聖餐」において展開する愛の論理とも異つたものであると思われるが、この問題については後考にゆずりた
いと思ふ。

第三幕以下にあらわれたデリラに関する変化で、留意に値する点は、まず、デリラもまた群臣たちによって裏切られる者として描かれているということである。未定稿において、

群伯と席を列べてこゝに居る婦人デリラは敬神愛國の心深く、且つ強く身を犠牲にするの決心を以てかの大力無雙のサムソンを捕へ終せた。デリラに対しては感謝の聲を合すがよい。(第二幕)

と、その功績が称えられていたのが、定稿では、

サムソンをパリシテの國境の中に住はせ、己れの家にかくまひ、これに暖き臥床を與へ、食物と飲物とを供へた、申しき妓女デリラは、その心

を敵に附した罪科によつて恥辱のあらん限りを味はせざるために、パリシテ人たるの名を奪つてこれを野に放つた。若しデリラに道に遇ふものは、民達の好むまゝなる屈辱を与へるがいゝ。さうして國を敵人に賣るものを見せしめにするがいゝ。(第三幕)

というように、辱かしめを与え追放されてしまつているのである。劇構成上の効果からみて、裏切りが、第二、第三の裏切りを生んでゆくという筋立ては、人間の現実の姿をよく言い当てているとはいふものの、いささか常套的でありすぎる。しかし、ここで有島がプロット構成上の不首尾にもかかわらずあえてこのような関係を描いたということは、ただたんに倫理的教訓を用意するためはあるまい。なぜならば、群伯たちの、自らの立場を守らんがための政治的奸計としての裏切りと、デリラの意図したところの、サムソンの愛を確かめんがための裏切りとは本質的に異つたものと思われるからである。群伯たちの、いわば通俗的な裏切りを描くことによつて、デリラのそれ
がより鮮明に、印象づけられるのである。

つぎに、第三幕結末部分のデリラ悔悛の場面における変化をとりあげるこ
とができる。

(1)サムソン、私をかこむ盾、私の榮、貴方の忠實な犬は今も貴方を慰める事を忘れば致しません。(デリラ、未定稿第三幕)

(2)貴方の神エホバは慈悲の行ないにも悔悛を求めないので御座りますか。(デリラ、くひあらためッ)

(3)お前は一杯の葡萄酒で真黒くなつた靈を洗はうとするのか。夫れが出来るか出来ないかを酒造りの主に聞くがよい。〔サムソン、〃〕

先にも述べたように、未定稿では群伯たちの、デリラへの裏切りが記されていないために、(1)のデリラのことばは、一瞬デリラはまだ裏切っているような印象を受けてしまうところである。もちろん、最後まで読み通してみても、デリラの悔悛を知ることができるのであるが、それにしても、未定稿のデリラのことばは、あくまでもサムソンを理解することのできない者であることを表わしているように思われるのである。この期におよんでなお、サムソンを「慰める」存在である、ということとは、この愛の確かさをまだ誤信していることのあらわれであろう。その気持が自らの行為を「慈悲」と称することにもあらわれているのである。サムソンは、その自己確信を「真黒になつた靈」と云いあらわしているのである。定稿では、この(1)(2)のデリラのことばが、タゴン神殿の祭司のことばに変えられている。そして、デリラのことばとして新たに、

(1)お、サムソン！私をかこむ盾、私の宮、あなたは私の聲を忘れずにおて下さつた。憎しみの爲めに覚えてゐて下さつた。私は嬉しい喜ばしい。〔第三幕〕

(2)憎んで下さい。呪つて下さい。打ちすゑて下さい。踏み躪つて下さい。私はあなたを裏切りました。盲目にしました。それを思ひ出して下さい。私のこゝにあるのを見て下さい……こんな哀れな姿になつて。お、あなたの眼は……〔〃〕

が加えられている。ここには、すでに自らの可能性を信する女、勝利した女、心たけき女の姿は見あたらぬ。涙する、心くだかれた女として、サムソンの前にひたすらひれ伏す女が描かれているのである。「こんな哀れな姿」とは、言いたサムソンの姿を悼むと同時に、自分の惨めな姿に対する思いがこめられていよう。このデリラの姿には、すでに、poetic womanへと変化する可能性を見出すことができるのである。それゆえに、

サムソンはたとデリラを地に打ち倒す。暫くの間憐憫に満ちた面持ちにて佇みたる後

女よ！〔第三幕〕

にみられるように、サムソンが思わず彼の大力をもってデリラを「はたと地に打ち倒した」ものの、彼女を見つめるその表情は「憐憫」に満ち、「女よ！」と呼ばれるその声には、愛と同情の響きがこめられていたのである。

この結末の部分におけるデリラの悔悛のことばは、勝利したはずのデリラが、実はそうではなかったことの告白である。それは、自らのうちにある愛の保証をその根底から失ってしまった女の、絶望の告白でもあろう。ただひたすら、エホバに義とされたサムソンの前にひれ伏すデリラの姿には、新しい愛の論理に生かされる女の面影がすでに見い出されるのである。勿論、それは人間としては多くの弱点をもち、誘惑に陥りやすい、神の前にはとうてい立ち得ない否定的な存在としてのサムソンが、新たに赦されたものとして生れ変わることである愛の論理でもある。その意味では、彼らは、(一)、(二)において述べた姦淫の女、罪の女のように、新しい愛の論理を表現させるもの

をひたすら待望する存在として描かれているということもできるのである。

四

第一節において述べたように、「洪水の前」の未定稿の段階では、有島の興味の中心は「運命の狂ひが本道に返るまでちつとこらへてくれる」、ノアの末子ヤベテにおかれていた。それに反して、カイン族の娘ナアマという女性は、せっかく「天人」というような聖書の記述にはない有島独自の人物造形がなされたものであるにもかかわらず、その存在は、ともすれば一種の規準としての役割を与えられた静的なもののように思われる。もちろん、ナアマが「心のきたなき」を自覚した存在であり、ヤベテとともに天使をも愛する自分を「憎み」「私の苦しみは天使も知らない、人も知らない」と嘆かなければならぬ者（第二幕）として描いてはいる。しかし、そのことばが、天使サミアサに対して発せられたものであって、彼女の苦悩の根源が天使の側に責任があるような描き方がされているところに、いわば人間としての苦悩の認識の度合の弱さがみられるのである。

有島は、登場人物について、

僕はセムに第十八世紀以前の思潮を、ハムに自然主義の思潮を、ヤベテに到来すべき思潮を、代表させた積りである。ナアマといふ（六十一）の境界に對してセム、ハム、ヤベテが取つた態度によつて思潮の向ふ所を暗示しやうとした積りだ。（足助素一宛書簡、前出）

としている。そして、ナアマの場合、「天」の側に重点を置くことによって、セム、ハム、ヤベテの思潮に対する一種の規準としての存在であらせている

のであろうが、そのことが、人間らしさをより稀薄なものにしてしまっているのである。だから、ナアマが、ヤベテの妻として方舟に同乗をさせられたとき、

カインの族はエホバの咀呪を受けた者です。私は方舟を汚します。（第二幕）

と答えたそのことばが、いたづらにカインの「族」としての罪を強調したものととして受けとめられ、彼女自身の内面化された罪意識としての響きが弱くように思われてしまうのである。

一方、有島の興味の中心であるヤベテは、この時期の有島の最大の関心事であり願ひであった人間解放への志向を持った存在として描かれているのである。

ナアマを妻として選んだヤベテに対して、父ノアは「エホバの呪を二重に受けて生れた者」を選んだことの愚かさを指摘する。しかし、ヤベテは、

私がナアマを選んで悪い譯が私にはわかりません。（第一幕）

といい、さらに、

カインの族も人です。人の持つものを私も持たうとするのです。

という。カインの族が神に呪われた存在であるとするならば、同じ人間であ

る自分も呪われた存在でなければならず、にもかかわらず自分が赦されうる存在であるならばカインの族もまたそうであるはずだというヤペテの考えには、神の義認を永遠の生命の可能性を人間の事実として信ずることへの希望が託されているということができよう。もちろんそれは、キリスト教の桎梏から解放された人間の、真の意味での人間解放への志向と、素材のもっている限界との間にある矛盾を内包した表現ではあるが、ヤペテが、「エホバのことば」である「何故」ということばを使う者として描かれているところに、人間解放への志向という有島の意図は象徴的に描き出されているのである。

* * *

ところで、この未定稿が「訂正しながら」「足助素一宛書簡、一九一九・十・三」書き改められたことによって、内容的に一つの大きな変化が生じた。「サムソンとデリラ」と同様一幕書き加えられているわけであるが、中心人物ヤペテの人間観が変化していると同時に、未定稿では比較的静的な存在でしかなかったナアマに、一つの積極的な役割が与えられているのである。ヤペテの人間観の変化は、ノアの予告どおり大洪水がおこり、ノアの方舟に入れたもの以外のものがすべて滅びゆかんとしているさまを、舷側に歩みより、空虚な眼差しで眺めやりながらも、嘆息まじりのことばの中に一番顕著なあたりであらわされている。

(私には)命へ生命Vがある。(私は生きる。私は悲しみにこの身をなげ與へては居られない。戦はまだ残されて居た。セムも戦ふだらう。然

し私も戦ふだらう。私の道は私が踏みしめて行く。(「虚ろな…命が」——「や、長く沈思せる後、涙して」舷側に歩みより——古き人の世よ。——遠きものを見る如くへ涙ぐみつ、じつとV眼前へ眼の前Vを見やり(つ)ナアマよ。…エホバよ。(…)」(第四幕)

定稿をもとにして、比較してみたわけであるが、() 内は、未定稿だけにある文、() 内は定稿だけにある文、Vは——を引いた定稿の語または文が未定稿ではVのように表現されていることを示している。ところで、未定稿と定稿とを比較してみると、() 内に見られる生命への可能性への確信は、定稿にはないことに気がつく。逆に「」内の否定的表現によって「滅び行く土塊よ」ということばが、定稿においてヤペテ自身の否定的自己認識の表白となっていることを知ることもできるのである。未定稿の場合は、生きること肯定し、その可能性を信じているがゆえに、過去への決別のことばとして受けとめることができよう。しかし、その前提が崩解してしまったところのことばとして発せられている定稿では、もはや過ぎ去ったものへの愛惜や感傷の表出などではなく、将来に向かって吐き出された絶望の吐息以外の何ものでもないのである。その意味では、ヤペテが「旧約時代に設定された *Isaiah* であり、この戯曲は *Isaiah* の悲劇である」という意見は正鵠を得たものであるということができよう。

ナアマにみられる変化というものも、実はヤペテが絶望的人間観を持った

存在として書き変えられたことと無関係ではない。彼女もまた否定的自己認識にもとづく人間の絶望的状况を実感した存在として書き変えられているのである。

ユバルも私も本當は半分天國の子供なのだ。けれども私もユバルも墮落した天の使の血を裏けて生れたからには、エホバの呪ひを殊更に深く受けたも同然なのだらう。(第三幕)

私は呪はれた女です。(〃〃)

私は罪によつて孕まれた女です。(〃〃)

二心の女です私は！私を憎んで下さいまし。(〃〃)

これらのことばは、定稿でヤベテに対するナアマのことばとして新たに書き加えられたものである。それと同時に天使サミアサに対して云われていた自己否定のことばは、消されている。未定稿において、ナアマが、ノアやセムから呪われた女、奸淫を犯す女として罵られていた。しかし、それはあくまでも「族」としての罪であり、神の義を盾とするノアや、それに形式的に追隨するセムのことばは、ナアマにはむしろ空しいことばでしかなかったはずである。だから、ナアマが否定的なことばを口にしたりしてもそれはむしろ天使の心ないわざへの恨みのことばであった。しかし、定稿では、それがナアマの心の中に沈潜し、内面化され、罪の意識にまで深められているのである。

エホバ！私は自分を存じません。誰も私を知らない。私の心を知る事は出来ない。この苦しむ心を。(第一幕)

ヤベテを恋し天使サミアサをも愛さずにはいられない者であることを告白させられたナアマの苦しみが、定稿にこのようにあらわされている。人間わざとは、とうてい思えぬような大きな罪であるがゆえに墮落天使を登場させている旧約の神話的部分が、有鳥の手によって、人間の否定的現実として書き改められたところであるということができよう。「二心の女」、それは、愛の保証を失った人間の裏切りの系譜に属する存在であり、「天」と「人間」との両つの世界に心誘われる者、つまり、人間その者でありそれ自体に、根底的な確かさを見出し得ないでゆれている者の姿でもあろう。しかも、「呪はれた女」という認識は、滅び行く、希望のない存在であるという否定的自己認識の生活化されたものであるということができよう。それが、天使にはなく、生の根拠を失って、自らも滅び行く存在であることを自覚しているヤベテにむかって訴えかけられていることばだけに、それはもはやキリスト教教義の枠を越えた実感としての絶望として、ナアマの心の中に定着しているということができるのである。

このように考えてみると、ナアマもまた、ヤベテともども、(二)で述べた姦淫の女、あるいは罪の女と同様に、絶望の淵に立ち、新しい愛の論理の到来を待望する存在であるということができるのである。

五

以上の考察により、未定稿における人間像の特色は、否定的自己認識に立ちながら、しかも自らの内部にある可能性を信じて、否定的状況を克服せん

とする存在であるということができよう。このことは、『或る女のグリンプス』の田鶴子が、孤独と不安のなかにあって、なお新しい人間として再生せんとして真実の愛を求め、「蛇が殻を抜け出ると同じに、自分の凡ての過去を葬」(二十章)ってしまい、真の意味での「勝利者」(十八章)であることを志向する存在として描かれていることを論証する一つの傍証とすることができよう。このことから一つの仮説をたてることができる。すなわち、以上述べてきた『三部曲』のうちの二つの作品の未定稿と定稿との間にみられる人間像の変化が、『或る女のグリンプス』と『或る女』への変化、つまり田鶴子から葉子への変化の内的事実として考えることができるのではないかということである。さらに、有島の『三部曲』への期待が、吹田あての書簡(大9・1・19)にみられるように、

一、エホバより「父なる神」への推移。

二、両性間の憧憬、争闘、調和

三、生命の向上、向下、及生命の自足。

であるとするならば、彼の最終的の目的は、はたして何によって可能になるのかという間がなされなければならないのである。とくに、「義」なるエホバより「愛」なる父なる神への展開の論理は、キリスト教会から離反した有島に即して考えるならば、それが旧来のキリストであるかぎり不可能であろう。それは、新しい有島の「キリスト」でなければならず、そこそ有島の本来に期待するものであったはずである。それでは、姦淫の女、ベタニヤのマリア、罪の女トータルのイメージを持ったマグダラのマリアを、

poetic woman として生まれ変えさせるところの、愛の論理にもとづく調和を、あるいは生命の自足を、目論むことは不可能なのである。このように考えてくると、『三部曲』の第三番目の作品「聖餐」には、有島の poetic woman が、それを支える愛の論理とともに描かれているのではないかというもう一つの仮説が可能となってくるのである。この二つの仮説からさらに推論すると、『或る女』と「聖餐」とは問と答との関係に立つ作品ではないかという、第三の仮説も考えられるのであるが、これらの仮説の実証については、稿を改ため、「聖餐」論として「或る女」の成立をめぐる(三)「梅光女学院大学国文学研究 第六号 昭45・11刊行予定」において試みてみたいと思う。(昭45・9・8)

注1 △関係年譜▽

明44・1〜大2・3 「白樺」に『或る女のグリンプス』連載

大4・9 「サムソンとデリラ」(未定稿)「白樺」に発表

大5・1 「洪水の前」(未定稿)「白樺」に発表

大8・3 「或る女」前篇出版

〃・6 「或る女」後篇出版

〃・12 「三部曲」出版

注2 Poetic woman は、有島が日記(明34・11・24)の中で、ベタニ

ヤのマリアをこう呼んでいるのであるが、この女性こそ、有島の一種の理想とする女性のイメージをもったものとして注目に値する存在だ

と思われる。詳しくは拙論「有島武郎研究」或る女」の成立をめぐって
(二)、(三)「梅光女学院大学国文学研究五・六号」を参照していただければ幸である。

注3 旧約聖書略解 日本基督教団出版部 昭41

注4 新英米文学評伝双書 ミルトン 研究社 昭40

注5 藤野文蔵 有島氏の「三部曲」を讀みて 開拓社 大9・3

注6 この問題については、拙論「有島武郎研究」教会退会後の自然観をめぐって(二)「近代文学試論第五号」などにおいて、いささか言及しているので参照していただければ幸である。

注7 A・カイパー、中村妙子訳 聖書の女性―旧約篇 新教出版社 昭39

注8 W・ホイットマン、有島武郎訳 草葉 「名もない淫賣婦に」 大10

注9 『冬の花火』の主題、思想について、太宰治が河盛好蔵に書いた書簡の一節。「ルカ傳七章四七の「赦さるる事の少き者は、その愛する事もまた少し」です。自身に罪の意識のない奴は薄情だ、罪深きものは愛情深し、といふのがテーマで「中略」いちどあやまちを犯した女は

優しい、といふのが私の確信なんです。」(昭21・8・22)と書いているところである。

注10 本多秋五 白樺派の文学「有島武郎論七、「大洪水の前」論」昭35

注11 「人間が増殖するに従って、天使たちと人の娘たちとの不自然な交合によって巨人が生れるに至った。ここに暗示せられている宗教的観念は、洪水直前に広がった罪悪は、ただ人間だけの起源とするには、あまりにも偉大であるというにある。」(前出旧約聖書略解 創世記第六章一節〜四節 巨人の起源解説)